

人肉強盗団 後編  
奴らの狙いは大量の現金と  
美女の極上生肉

作者 大黒達也



『人肉強盗団 後編』

作者 大黒達也

一・あらすじ

完全武装した銀行強盗団が、新宿にある都銀を襲撃した。軍隊同様の装備を有する彼らの前に警察は為すすべが無く、十億円の現金と数名の人質を奪われる。

人質は皆、容貌肢体が整った美女達で、全裸にされ何処へとも無く連れ去られる。

彼らに果敢に立ち向かうのは、警視庁に特設された特別対策室のメンバーである。メンバーは皆女性で、彼女達を率いるのは警視庁きつての美女であり、凄腕を誇る工藤真弓であった。謎の銀行強盗団と警視庁のアマゾネス軍団によって、東京を主要舞台として戦

闘が繰り広げられる。彼らの正体は、またその真の目的は何なのか……。

## 二・登場人物

工藤 真弓  
くどう まゆみ

警視庁公安部外事一課警視、警視庁一の美しい容貌  
肢体を持ち、テロリストを単身で殲滅させる凄腕の持

ち主

後藤 瞳  
ごとう ひとみ

警視庁公安部公安課警部、顔立ちも目鼻立ちがくつきりとした美人。数か国語の外国語をマスターしている。

白石 しらいし  
美由紀 みゆき

警視庁航空隊所属役職は警部、ヘリの操縦にかけては警視庁内で並ぶものがない。

木下 きのした  
真理子 まりこ

警視庁科学調査課警部、格闘術が得意であり、真弓と互角の勝負ができる警視庁唯一の女性だった。

少佐 しょうさ

謎の銀行強盗団の首領、強力無比な戦闘能力を有する

アリサ

謎の銀行強盗団の女戦士、残虐な性格と美貌の持ち

主

三・ 目次

第一章 悪魔の宴

第二章 誘拐

第三章 少佐

第四章 真理子

第五章 攻撃

第六章 対決

第七章 復讐

## 『本編』

### 第一章 悪魔の宴

そこは、トチノキやコナラ等の深い広葉樹林の森に  
囲まれた老人ホームの一角に位置していた。その土地  
の一边を通る一本の国道のみが、外界と老人ホームを  
繋ぐ唯一の道だった。老人ホームの建屋は、建坪が五  
百坪程で、総二階の鉄筋コンクリート建てだった。そ  
こからさらに奥まった一角に、深い木立に隠れるよう  
にして、建坪三百坪程の平屋の鉄筋コンクリート住宅  
が立っていた。

その正面には、砂利を敷き詰めた駐車場があり、一台  
の大型トラックが止まっていた。

玄関の扉を開くと、正面にニメートル四方程のガラ

スドアがあり、そこから先は百坪程の中庭になっていた。西洋風の中庭には中央にプールが、満々と青い水を湛えていた。その建物の一室では、今まさに悪魔の宴が始まろうとしていた。

五十帖ほどの広さの部屋で中央に、縦一メートル横二メートルの大きさの調理用テーブルが置かれていた。また、その近くには縦一・五メートル、横一メートル、高さ〇・五メートルのコンロが置かれていた。上には金網が敷かれ、中には真つ赤に燃えた炭がいっぱい詰まっていた。コンロの両端には床から直径五センチほどの鉄製の杭が立てられており、杭の上部は二股になっていた。それらの周りを取り囲むように椅子やテーブルが置かれ、少佐や他のメンバー達がワイ

ン等のドリンク類を飲みながら歓談していた。

両開きのドアが開けられ、料理長の陳が現れ、一行に軽く挨拶した。続いて、助手二人がキャスター付きのテーブルを押ししてきた。その上には素っ裸で目隠しと耳あてをされた紀子がうつ伏せに寝かされていた。

紀子のりこは、銀行強盗団によって拉致された人質であった。年齢二十一歳、大学四年生で法学を専攻していた。清楚で整った容貌を持ち、グラマーな肢体を持っていた。女優としても十分通用するだろう。

「紳士・淑女の皆様、本日もお忙しい中、恒例の晩餐会にご参加くださいます有り難うございます。本日の食材は、ここに用意いたしました牝豚でございます。牝豚にはアルコールと少量のモルヒネを与えており

ますので長い間、苦痛に堪え、皆様のお楽しみに添えるものと期待しております。さて、本日は、牝豚を串刺しにし、たつぷり時間をかけてローストするつもりです。お手元にご用意した用紙にご希望の部位、例えばオマ＊コ等と記入して下さい。希望者の多い部位については後ほど抽選にて決めさせていただきます」

観客席に歓声のどよめきの声が上がった。料理長の陳が二人の助手に目配せした。助手の一人が紀子を抱き上げ、調理用テーブルに載せ、目隠しと耳あてを外した。

紀子は調理用テーブルに両手をついて辺りを見回



した。アルコールとモルヒネのせいか、目は虚ろで、頬にほんのりと赤みがさしていた。助手の二人が左右から、手足を掴み四つん這いの格好をとらせた。調度、股間が観客席によく見える角度になっていた。観客席からは、股の間に豊かな両乳房がつり下がっている様子が見えた。股間にある筈の陰毛は、薬液によりすべて脱毛されていた。頭髮以外もすべて同じ処理をされていた。

陳は、四つん這いになった紀子のサーモンピンクのアヌスにオリーブオイルを塗った人差し指を出し入れした。紀子は屈辱と快感が入り交じった複雑な表情を浮かべた。そこへ見物人のアリサが近づき、紀子の唇に吸い付き、口の中を舌でかき回した。他の見物人

が歓声をあげた。オリーブオイルで滑りが良くなったところで直径三センチのホースを十センチ位差し込み、吸引機のスイッチを入れた。「キューーン」という機械音がして、排泄物を吸い出すゴボゴボという音がした。これで宿便もきれいさっぱり無くなった筈だ。ホースを抜き取り、アヌスにシャワーを吹き付け洗浄した。

その間、二人の助手が紀子の身体中にオリーブオイルを塗りたくっていった。オイルまみれの手が股間に触れる度に、紀子の口から喘ぎ声が洩れた。アリサが、また席を離れ、調理用テーブルに近づいた。観客達の顔をさっと見渡し、一気に黒いドレスを脱ぎ去った。

下着は何も付けておらず、日本人離れをした豊かな肢

体が現れた。重たげな乳房と盛り上がった尻を持っていた。

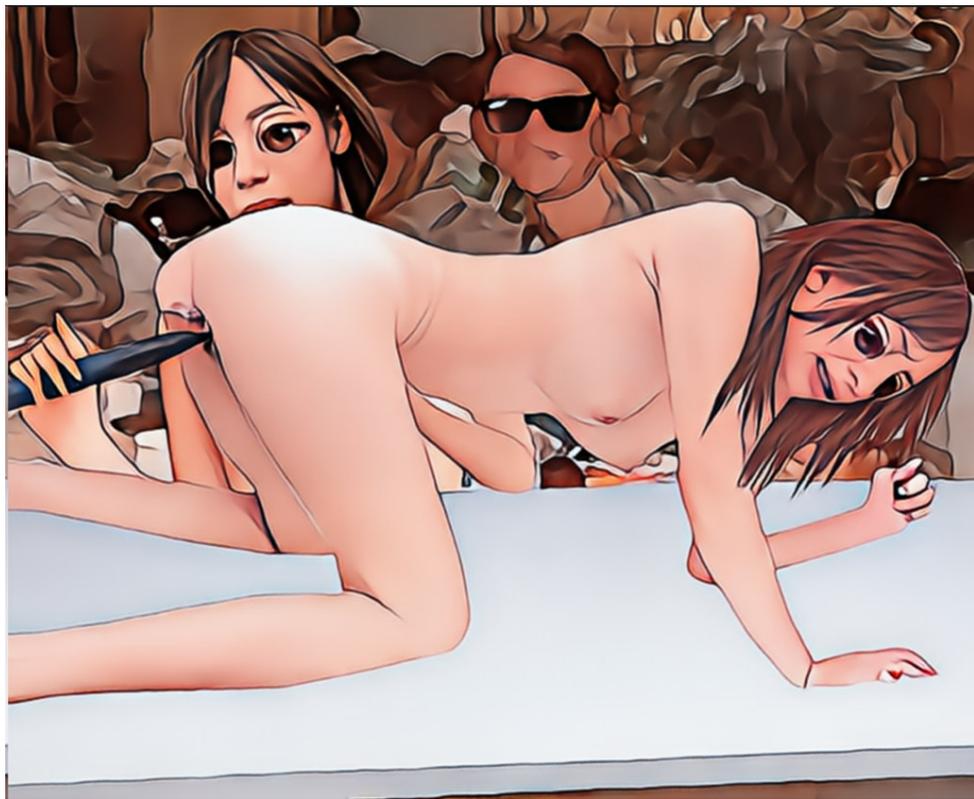
「ヒューヒュー」

観客達にどよめきの声が上がった。得意げな顔で、調理用テーブルに上がり紀子を抱きしめるような格好で横になった。嫌々をする紀子の唇を強引に奪い、舌を入れてかき回した。紀子の舌は甘く蕩けるような味がした。

さらに、豊かに盛り上がった釣り鐘上の乳房を舌で十分に愛撫した後に、紀子の太股を大きく広げ、股間に顔を入れた。舌で包皮を捲り小粒なクリトリスを舐めた。オリーブオイルと愛液で濡れた膣に、舌を入れてかき回した。それらを交互に繰り返した。

数分の後、紀子が腰を持ち上げ逆海老剃りのかっこうになり、絶頂を迎えた。ぐったりとした紀子を四つん這いにさせ、二人の助手に両手両足を押さえさせた。それを合図に陳が調理テーブルの下から長さ二・五メートルほどの鉄製の串を取り出した。その一端には鋭い穂先が取り付けられていた。アリスは調理用テーブルの横に立ち上がり、鉄串を受け取った。

「さて、皆様、これからショーの始まりです」  
アリサは満面の笑みを浮かべながら、紀子のアヌス



にその穂先を十五センチほど一気に突き刺した。紀子の身体がビクンと揺れた。紀子は首を大きく後ろ向きに曲げ、激痛の原因を探ろうとした。自分のアヌスカら突き出している鉄串を見て、目を大きく見開き、口を大きく開けた。絶叫が飛び出し、身体を激しく上下左右に動かした。両手両足は、屈強な男達により拘束されていたので、逃げることはできなかった。

「止めて！人殺し……。痛い！痛い……」

「静かにしろ、牝豚。お前はこれから調理されお客様に食されるんだ」

アリスは、さらに鉄串を握む手に力を入れた。鉄串は、一気に五十センチほど突き刺さり、紀子は白目を開けて失神した。鉄串を飲み込んだアヌスカから少量出

血した。そして、股間から失禁による尿がほとぼしり  
出た。陳がシャワーでそれらを洗い流した。アリサは  
さらに鉄串をアヌスに押し込んだ。紀子の肩口から穂  
先が飛び出した。その先が五十センチほど出たところ  
でアリサは鉄串を手放した。

「内臓は避けて、鉄串を刺し込んであります。すぐに  
は死にませんのでご安心下さい」

アリサが陳の口調を真似た。そして客席から赤ワイ  
ンのボトル持ってきて、腹這いになり鉄串を打たれた  
紀子に近づいた。赤ワインを紀子の顔面に注ぎかけた。  
「そろそろ起きなよ」

紀子は失神から醒め、自由になった右手を尻の方に  
持っていた。自身のアヌスから突き出ている鉄串を

掴んだ。そして天井を見上げ、口を大きく開き絶叫した。二人の助手が泣きじゃくる紀子を後ろ手に縛り、太股をくの字方にし、両足首を鉄串に紐で固定した。膾までよく火が通るようにとの配慮だった。

鉄串の両端を持ち、コンロの近くに運んだ。鉄串の両端を、床から突きでた二本の鉄柱の二股部分にかけた。頭部以外の部分が、直接コンロの火に炙られるように調整した。その時点で紀子の身体とコンロの鉄網の間隔は一メートルぐらいだった。

「この二本の鉄柱は、ご存じのように上下動が可能です。このスイッチで高さを調節します。まず、三十分ほど、この位置で炙ります。その間に調味料で味を整えます。それから三十分はさらに五十センチ下げて炙

ります。焼き上がりましたら、調理用テーブルに戻し解体します。ご希望の肉を切り取りますので、お召し上がり下さい」

コンロの上に串刺しにされた紀子の身体を、助手がゆっくりと回転させ始めた。紀子は既に悲鳴をあげるのとは止めていた。弱々しい声で助けを求めていた。コンロから放射される輻射熱によつて紀子の全身は赤く照らし出されていた。今はまだ表面を焼いているに過ぎないが、そのうち骨髓までちょうどよい具合に火がとおる筈だ。観客達は、歓談を中止し、残酷で扇情的なショーに魅入っていた。

炙りはじめて二十分位後に、陳が塩や胡椒等の調味料を紀子の全身に振りかけ始めた。股間には特に入念

に調味料を手ですりつけた。指で膣内にもすりつけているようだった。紀子はまだ話すことはできるようで、しきりに陳に対し悪態をついていた。豊かな両乳房の先端から溶けた脂が滴り落ちていた。陳が小振りの肉切り包丁で右乳首を切り取った。それを小皿に入れ助手に手渡した。助手はそれを少佐のいるテーブルに置いた。少佐はそれを箸でつまみ上げ、口に放り込み、咀嚼し飲み込んだ。

「美味だ」

三十分が経過し、鉄串の高さはコンロの金網の表面から五十センチのところ固定された。腹の部分が大きく膨れ上がってきた。陳は小振りの肉切り包丁の先端で、腹の膨らみを突いた。ガスが洩れたのか、

元の状態に戻った。紀子にはまだ息があった。しきりに意味不明なことを口走っていた。

丁度一時間後、紀子は串刺し鉄串を刺されたまま、調理用テーブルの上に運ばれた。顔以外は綺麗な狐色に焼き上がっていた。陳はアヌスの方から鉄串を一気に抜いた。紀子の意識は混濁しているようだが、まだ息はあった。

陳は大振りの中華包丁を取り出し、乳首の無い右乳房を掴み上げ、切断した。次に左乳房も同様にした。助手がそれらを大皿に盛り上げていく。陳は、細身のナイフを取り出し下腹部に突き立て、股間へと滑らせ、アヌス近くまで切りすすめていく。次に刃を返し、下腹部まで折り返した。握り拳大の性器部分が切り取ら

れた。それをまな板に載せ、大陰唇をめくりあげると湯気が立ち上がり、鮮やかなピンク色をした膣口が見えた。

「湯気が出ているぜ」

「汁気も多そうだ」

観客はいつの間にか席を離れ、陳の包丁裁きが間近に見られるように周りに集まってきた。性器部分は、希望者が多すぎて抽選にするにはどうかという意見が出ていた。それで陳の判断で皆に分配することに。その程度の裁量権は与えられていた。まず、クリトリスから刃を入れて、二つに切り分けた。そしてそれを一口大に切り分けていった。皿に盛ると、観客達はそれに群がるように手を出して、あつという間に

無くなってしまうた。

「旨い。歯ごたえも抜群だ。しこしこしてアワビより  
いけるぜ」

「アリサのオマ\*コと、いい勝負だな」

クリスがアリサをからかうように言った。

「今度はあんたのオチン\*ンを調理してやるよ」

アリサがクリスの股間を鷲掴みにした。陳は次に、  
紀子をうつ伏せにさせ、湯気を立て、十分に脂がのつ  
た尻肉を切り取った。アヌス部分は細身のナイフで器  
用に切り取った。切り取られた尻肉も刻まれ男達の口  
に放り込まれた。女から見ても魅力的に見える太股の  
肉もブロック大に切り分けられ、さらに一口大に刻ま  
れ大皿に盛られた。両手足が切断され、胴体と首だけ

になった。

陳は、慎重に、仰向けにした胴体の腹部を細身のナイフで切り裂いていった。カラフルな色をした臓器が現れた。陳はそれらを両手で掴み、大鍋に入れた。心臓と肝臓だけは、大皿に盛りつけた。最後に首を切断し、それを大皿に立てかけた。

「皆様、今晚のメインディシュの味はいかがでしょうか？さて今宵はこの食用豚の他に、牝豚を二頭用意しております。存分にお楽しみ下さい」

両開きのドアが開き、素っ裸で鉄串に両手両足を縛られた涼子と美穂が運ばれてきた。二人はそれぞれ客席のテーブルの上に運ばれ、手足の拘束を解かれた。

涼子が紀子の生首に気づき、口を大きく開き、叫び声

をあげ始めた。美穂も気づいたのか、白目を剥いて失神した。アリサが立ち上がり、涼子の頬を殴りつけた。

「静かにおしよ。この牝豚が。お前もこうなるんだ」

アリサはフォークに刺した肉汁が滴る紀子の尻肉を旨そうに頬張った。そして助手に命じ、涼子を仰向けに寝かせ、両足を上げさせ、太股を押し開かせた。

サーモンピンクの膣がパツクリと口を開けた。

「少佐。ワカメ酒ってのは、こう飲むんだよ」

隣の少佐にウインクし、膣口にワインのボトルの口をあて、中身を注ぎ込んだ。口をつけ、音を立てながら吸い始めた。いつの間にかクリスが、涼子の豊かな乳房を揉みながら、男根を口に啣えさせていた。男根を喉の奥まで突き入れるので、苦しさのあまり、目に



いっぱい涙をため、下半身を微かに震わせていた。ア  
リサは一本目のボトルを空け、二本目を涼子の膺に注  
いでいた。

調理用テーブルでは、陳とその助手達が、失神した美穂を仰向けの姿勢で寝かせ、細身のナイフで腹部に縦の切り込みを入れていた。血が噴水のように吹き出していた。美穂は激痛のためか、一度失神から醒めたが腹を裂かれている状況を目撃し、白目を剥いて再度失神した。腹部を割き、内臓をすべて取り出した。その瞬間、四肢が激しく痙攣し、すぐに動かなくなった。瞳は閉じられたままだ。内臓の代わりに、米や野菜等を詰め糸で縫合した。そして黄身を混ぜた岩塩を、顔を除く全身に厚く塗り始めた。次に、アルミホイルを巻き付けていった。顔は露出していたが、他は繭のようにアルミホイルが巻かれた。部屋の壁際に設置された巨大なオーブンの扉を開け、美穂を中に入れた。オ

オーブンの側壁には、頭部が通る穴が開いており、美穂の顔はその穴を通し、オーブンの外側に出された。陳によつてオーブンのスイッチが入れられた。数分後、肉を焼く香ばしい匂いが漂い始めた。

テーブル席では、アリサとクリスによる涼子への陵辱が続けられていた。涼子は恐怖によるものか泣きはらした顔は虚ろで、二人の意のままにされていた。アリサがうつ伏せにした涼子のアヌスと膣に葡萄等のフルーツを、片端から突っ込んでいた。一方、クリスはワインをボトルごと涼子に飲ませていた。

「こいつを、このまま焼いたら、さぞフルーティな味がするだろうね」

## 第二章 誘拐

真弓達三人のメンバーは深夜近くまで、六本木のスナックで飲んでいた。終電が近づいたのでお開きにすることにした。三人はスナックが入っているビルの前で別れた。真弓は酔い冷ましに少し六本木の通りを歩くことにした。酔った中年男やチンピラが、傍らを通り過ぎる度に声をかけてきた。ミニスカートから伸びた長い足をじっと見つめるのは皆同じだった。十分ほど、夜の街を散策した時、尾行に気づいた。尾行は一人だった。真弓の二十メートル後方につけていた。真弓が急ぎ足になれば尾行もそれに合わせ影のように放れなかった。自動拳銃ベレッタ九ニャが入ったバッグを掴む手に自然と力が入った。すぐ近くにクラブK

のネオンサインが目についた。扉を開け、中に入った。店内では十代の男女がパラパラを踊っていた。入り口から死角となる位置で、様子を窺った。すぐに、ダークスーツに身を包み、がっちりとした体格の初老の男が現れた。彼奴だった。銀行の防犯カメラで捕らえた白髪混じりの短髪に四角い顔、眼光が異様に鋭い感じの男だ。男が、真弓が潜んでいる方を見てにっこりと微笑んだ。

奴は悪魔か。真弓は寒気を感じた。男がゆっくりと真弓のいる方に近づいてくる。何人かの男女とすれ違いくらい様にぶつかっていた。

「いてえよ！」

派手なシャツを身につけ長髪のチンピラが大げさ

な声を上げた。

「やい。爺。どこに目つけているんだ」

男はチンピラを冷たい目で上から見下ろし、右手で襟首を掴んだ。ゆっくりと腕を上を上げていった。チンピラの足が床から放れ、爪先が空を切っていた。チンピラは痩せ形であるが、六十キロは優にあった。それを片手で持ち上げるとは通常の腕力の持ち主ではない。男はぼろ切れのようにチンピラを投げ捨てた。チンピラは床に腹這いになりゼイゼイと苦しそうに息を吐いていた。男は何事も無かったように、真弓の方を指して歩き始めた。一部始終を目撃した客達は素早く道を開けた。真弓はここで決着をつけるべきかどうか躊躇していた。場内には少なく見積もっても二

百人以上の人間がいた。ここで撃ち合っては大勢の犠牲者が出る筈だ。そんなことを考えているうちに男は、すぐ目の前まで迫っていた。真弓に前に止まり丁重な挨拶をした。

「素敵なお嬢さん。一曲踊っていただけませんか？」

真弓が返事をする前に、腰を抱かれた。逞しい身体だった。筋肉のかたまりに抱かれているようだった。

男は今風のステップを踏みはじめた。男の身長は百八十五センチ位だろうか。強い力で抱きしめられた。真弓の爪先は軽く床に着いているだけで男の圧倒的な力によって踊らされていた。男の右手が真弓の豊かな尻を掴んだ。ゆっくりと下に下がリミニスカートの奥に滑り込んだ。

「止めて……」男の口が真弓の口に重なり、強引に舌を入れてきた。

男は真弓の唾液を旨そうに啜りだしていた。男の太い人差し指がアヌスにくい込み、中をかき回した。真弓のパンティは、いつの間にか愛液で濡れ始めていた。真弓は両手を大きく突きだし男から放れた。下を向き、「はあはあ」と肩で息をした。顔を上げるとそこに男はいなかった。

周囲を見回した。男が客の若い女と連れ添い、非常口と書かれたドアをくぐって消えた。真弓はハンドバッグに右手を入れ、自動拳銃ベレッタ九二Fの安全装置を外しながら、後に続いた。階段を上るハイヒールの靴音が響いていた。

「キヤー！」

女の悲鳴が突然聞こえてきた。真弓は自動拳銃ベレツタ九二Fを右手にかまえ階段を一気に駆け上がった。踊り場に若い女が、仰向きに倒れていた。切れかけた裸電球が、女の身体を暗がりの中から浮き上がらしていた。女は既に絶命していた。洋服の前は裂かれ、白い乳房や性器が剥き出しにされていた。性器からはバタフライナイフの柄が飛び出していた。首に絞められた痕が残っていた。頸椎が砕かれているようだ。ほとんど即死状態だった。突然、真弓は鳩尾に強烈な衝撃を感じ、すぐに意識が遠くなった。

下腹部の異様な感じに気が付いた。目を開けると、六本木の夜景が飛び込んできた。遠くの方で小さな何

かが動いていた。目を凝らした。急に吐き気を催した。それらは、走行中の車両だった。すぐにすべてが明らかになった。真弓は自分が全裸で、屋上の縁に逆さまに吊り下げられていることを。



さらに襲撃者が後ろから真弓の腹部に手を回し、身体を支えていることを。さらにその男が真弓の露になった膺やアヌスを舌で舐っていることを。

真弓は、これまでの人生で感じたことのない恐怖と戦きを覚えた。全身に鳥肌が立った。男がちよっと力を抜けば、真つ逆さまに落下し地上に叩き付けられる運命だった。男の舌が褰を這い回り、クリトリスに吸い付き、強く吸引した。ぴちやぴちやという厭らしい響きと男が上げる荒い息が交差していた。急に痺れるような快感が襲ってきた。男の頭を太股で締め付け、両手で顔を覆い、鋭い喘ぎ声をあげた。髪を振り乱し、大きく仰け反った。真弓はその状態で二度、絶頂に導

かれた。

「満足したか？」

気が付くと、屋上の床に仰向けに寝かされていた。

太股の合間から男の顔が見えた。男は真弓の太股を驚  
掴みにし、大きく開いた。男の物は驚くほど大きかつ  
た。子宮深くまで貫かれた。気が付くと真弓は男の背  
中に手を回し、爪を立てていた。男の舌が、真弓の口  
内をかき回した。真弓の舌を吸い出し、音を立ててし  
やぶった。男は舌の感触に満足すると、重たげな乳房  
を口に含みながら、時に緩慢に時に激しく腰を叩き付  
けた。真弓は息も絶え絶えに号泣を放っていた。真弓  
は四肢を突っ張り三度目の絶頂を迎えた。男はぐった  
りとした真弓を四つん這いにさせ、サーモンピンクの

アヌスに舌を深く突っ込んだ。

「あー。おー。いい……。もっと舐めて！」

十分に潤みきったアヌスに禍々しい感じのする男根を挿入した。「ずぶり」という音がして直腸深くまで貫かれた。男は真弓の重たげな白い乳房を鷲掴みにして、こねくり回した。痺れるような快感が、真弓の脳天を貫いた。

「もう駄目。凄い……。あ……。駄目……。行っちゃおう。行く……。」

男は腰を激しく使いながら、真弓のうなじを軽く噛んだ。真弓は逆海老剃りになり四肢を突っ張った。がくんという感じで床に突っ伏した。はあはあと肩で息をしていた。男が離れるのを感じたが、腰が痺れて動

かなかった。両手を後ろに回され、「ガチャリ」という音が聞こえた。男は真弓の手錠を使って、真弓を拘束した。真弓を仰向けにした。大きな手で真弓の乳房や性器を撫でた。

「お前は、これまでで最高の女だ」

男の声が少し上擦っているように聞こえた。男は膝のベルトから、大振りの狩猟用ナイフを抜いた。

「ここで殺すのは、忍びないが、お前を生きたまま連れて返る自信はないんでね。今晚は一人で食事だ。お前を生きたまま喰らってやろう」

男の欲情に濡れた視線が真弓の乳房や性器に注がれた。真弓は金縛りにあったように動くことができなかった。まるでネコに睨まれたネズミのようだった。

男によって加えられた陵辱の余韻が全身に残っていた。

男が、仰向けになっても、豊かに盛り上がった乳房を左手で掴み、根本にナイフを当てた。その時、暗闇に銃声が響きわたった。男の身体が揺れ、真弓から離れ驚くような早さで屋上を疾走した。隣のビルの屋上に向かってムササビのように跳躍した。男を追うようにして、銃声が連続的に鳴り響いた。

「どうやら逃げられたようね。怪我はない？」

美由紀が、真弓の裸の肩を抱いた。

「大丈夫だと思うわ。手錠を外して」

「ちょっと待って」

美由紀は黒光りするグロック三十を、ベルトにはさ

み辺りを窺った。

「有ったわ」

真弓のハンドバックを拾い、中から手錠の鍵を取り出した。陵辱のためか全裸でぐったりと横になってい  
る真弓の背後に近づいた。女が見てもはつとするよう  
な白く盛り上がった尻の合間から、精液が滴り落ちる  
のが見えた。自然に手が尻の合間に吸い込まれた。

「可哀想な真弓」

真弓は肩越しに美由紀の顔を見つめた。美由紀は真  
弓の裸体に気が動転していた。真弓の顔を両手でさせ  
え唇に吸い付いた。真弓の唾液が蜜のように甘く感じ  
られた。真弓を仰向けに寝かせ、太股を広げ、顔を埋  
めた。包皮をめくりあげクリトリスを舌で舐った。真

弓のむっちりとした太股が美由紀の頭を強く締め付けた。男によって犯されたアヌスに深々と指を差し込み、中をかき回した。

真弓は、一層美由紀の頭を強く締め付け、そして「ガクン」と仰け反り絶頂に達していった。ぐったりとした真弓をうつ伏せにした。真っ白い尻の膨らみが目に飛び込んできた。自然に手を当てていた。陶磁器のようになすべすべとした感触だった。

「食べてしまいたいくらい好きよ」

美由紀は上擦った声を上げながら、尻の割れ目に顔を埋めた。

翌朝、真弓は美由紀のベッドで目が覚めた。美由紀

が全裸で隣に眠っていた。あれから、美由紀の自宅に連れていかれ、介抱を受けた。襲撃者との格闘によって、全身に軽い打撲を負っていた。それからベッドに入り美由紀に抱かれて眠りについたことを思い出していた。目を瞑ると脳裏には昨日の陵辱シーンがはっきりと浮かんだ。不思議と屈辱感は感じなかった。ビルの屋上で逆さ吊りにされ、膣を舐めあげられたことを思い出した。ざらついた舌の感触が未だに鮮明に残っている。真弓の手は自然と自らの股間をまさぐっていた。

いきなりその手を掴まれた。目を開けると美由紀が、じっと真弓の顔を見つめていた。

「お早う。まだ物足りないの？」

「……」

美由紀はにっこり笑って、蒲団に潜り込んだ。太股を掴まれ、臍に暖かい舌が差し込まれた。

真理子は地下鉄に乗ろうとした時に尾行に気がついた。皆と別れた時から同じ女が後をついてきていた。人目を惹く美人なので目立った。一瞬毘であると感じたが、その女を捕まえてみようという気になった。誘いをかけてみることにした。地下鉄駅をやり過ごし、近くの公園に向かって歩き出した。案の定、女はついてきた。

公園の入り口近くにあるトイレに入る振りをして、植え込みに身を隠した。女の様子を窺った。突然、気

配が消えた。背後から抱きつかれた。真理子は背負い投げを打った。見事に決まり女は、強かに背中を地面に叩き付けた。

「……中々やるわね」

アリサが、頬のかすり傷を擦りながら、立ち上がった。

「でもこれには敵わないわね」

何時の間にか、小型拳銃を手にしていた。スマートなシルエットをもつブローニング三八〇だ。真理子は拳銃を所持しなかったことを深く後悔した。

「……」

「さあ。バッグをよこしな」

真理子はアリサにバッグを放った。アリサはバッグの中から手錠を取出し、真理子に放り投げた。

「まず、左手にかけな。それから両手を後ろに回して右手にかけるんだ」

真理子は、言われたとおりにした。

「ゆっくり回って後ろを見せな」

後ろに回した両手に触られた。アリサは手錠が確実にはめられていることを確認していた。その手が次第に下に降りていき、ミニスカートの上から尻の膨らみをなで上げ、さらに太股の間に手を入れてきた。パンティの隙間から指が、進入しアヌスに深く差し込まれた。

「お前。いい身体しているね。肌も吸い付くように滑

らかだ」

「……」

「お姉さんが可愛がってあげるよ」

突然、後頭部に衝撃を感じ、意識が遠のいた。

股間に異様な感じを覚え気がついた。少しの間、失神していたらしい。公園のベンチに仰向けの姿勢で太腿を大きく広げられ、寝かされていた。股間に先ほどの女が、顔を入れ舌で性器を舐っていた。生暖かい女の舌が、膣口からクリトリスにかけて這い回っていた。包皮が捲られクリトリスを強く吸われた。シャツのボタンを外され、ブラジャーもなく見事に盛り上がった乳房が剥き出しにされていた。女の手が鷲掴みにして、

こねくり回していた。



「気がついたかい？オマ＊コ汁も旨いね。遠慮しないで逝っていいからね」

アリサは真理子の太股を高く上げ、今度はサーモンピンクのアヌスを舌を深く入れてきた。小波のような快感が、湧きあがり声を立てそうになった。難解な数学の問題を頭に浮かべ、必死に快感を押さえようとした。効果が見られはじめた時、乳房を強く掴まれた。「気をやらないと殺すよ」

突然、膣内にこれまでの人生で感じたことのないような遺物感を感じた。

「あたいには、チ\*ポがないからね。代わりにこれで逝かせてあげる」

異物感の正体は、拳銃の冷たい銃身だった。アリサは、指先でアヌスを刺激しながら、それをゆっくりと出し入れした。

「ああ。いい……」

突然、突き上げるような快感が沸き上がり、我を忘れた。アリサの手の動きに合わせて腰を揺り動かしていた。

「駄目。止めて。いい……。逝く。いっちゃう！」

身体が大きく逆海老反りになり、そしてガクンといった感じで果てた。きれいなピンク色をした膣から愛液が滴り落ちた。アリサがそれを舌ですくいあげた。

公園の近くに停車していたキャンピングカーには、下半身をむき出しにしたアリサと、全裸でアリサの股間に顔を埋め、舌で懸命に性器を愛撫している真理子が乗っていた。真理子は後ろ手に手錠を掛けられ、床

に両膝をつかされていた。後部席のドアが開き、少佐が現れた。

「お帰り。少佐。お土産は？」

「逃げられた」

少佐はダークスーツの上着を脱ぎ、銃弾の痕が残る防弾チョッキを外した。

アリサは、いつもより口数が少ない少佐のズボンのチャックを開け、中身を引っぱり出して匂いを嗅いだ。

「牝豚の匂いがするわ」

「もう少しのところだったが、邪魔が入った」

「ふーん。まあ。仕方がないわね。私はこのとおり牝豚を一匹捕まえたわ。食べる？」

少佐はアリサの隣の席に腰掛けた。

「疲れた。少し休みたい」

「へー。この牝豚が気に入らないの？おい。お前。立ちな」

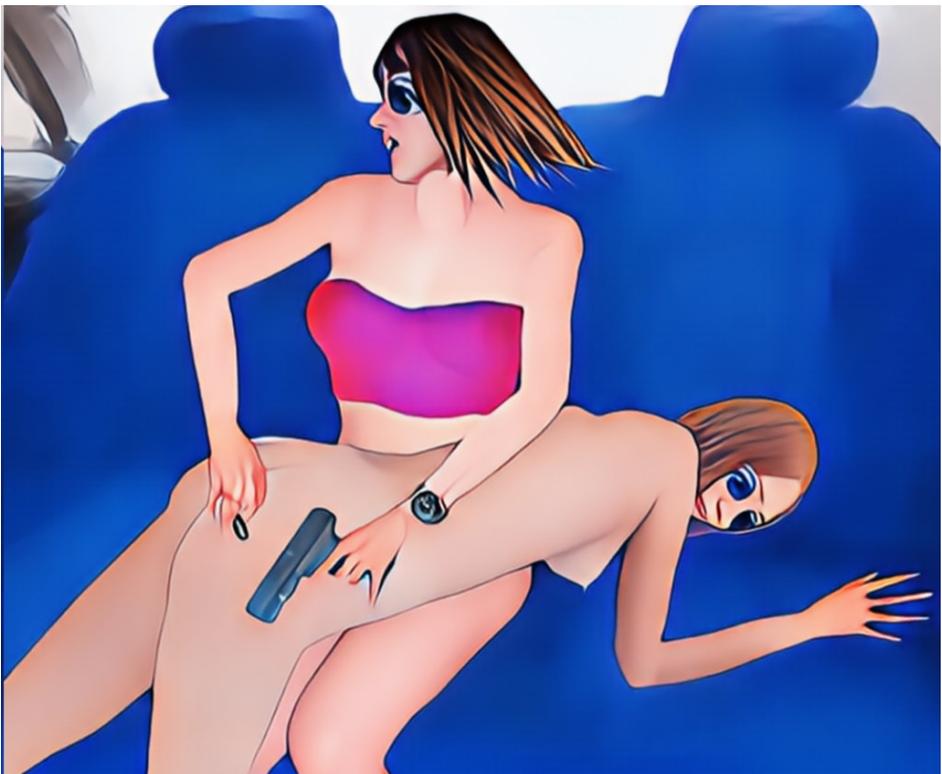
中腰になった真理子をうつ伏せの格好で膝に載せた。アリサの目の前には白くすべすべした剥きタマゴのような大きな尻があった。アリサは真理子の尻の合間に顔を入れ、舌でアヌスを舐り始めた。

「あーん」真理子が喘ぎ声を上げた。

「気持ちいいかい。もっとよくしてあげるよ」

ブローニング三八〇の弾装を外し、三十八ACPの弾丸を七発取り出した。少佐に意味深な笑顔を向け、弾丸を一発ずつ真理子のアヌスに押し込んでいった。

空いている方の手で真理子の膣を刺激しながら、七発すべてを挿入した。弾丸をアヌスに挿入される度に、



「ああ。止めて。いや。痛い！」

剥き卵のようにすべすべの白い尻が震え慄いた。

「あんまり動かない方がいいよ。直腸がずたずたになるから」

隣で一部始終を見守っていた少佐が立ち上がり、ズボンを脱いだ。下着は付けておらず、屹立した長大な男根が現れた。それを真理子の膣に一気にねじ込み腰を使い始めた。アリスは真理子の重たげな乳房をこねくり回しながら、口に吸い付き、舌を入れかき回した。真理子はあまりの快感に我を忘れ、喘ぎ続けた。

「真弓。瞳から国際電話よ」

真弓は、受話器を取り立ち上がった。後ろを向き、

窓外を眺めた。

「もしもし。真弓？」

「何か掴めた？」

「今、少し前にメールを入れたわ」

「ちよつと、待って」

真弓は受話器を胸の谷間に当て、

「美由紀。瞳からのメールが届いている筈なんだけ  
ど」

と言った。美由紀はパソコンに向かい、起動しておい  
たインターネットエクスプローラのメールボタンを  
マウスでクリックした。

「届いているわ」

「届いているそうよ。聞こえた？」

「細かい内容はメールで確認して。手短かに話すわね。」

フランス外人部隊には、過去から現在までに十名の日本人が在籍していたの。その中で一名が現在、行方不明よ。もう二十年も前の事だけど。一九七八年五月、中央アフリカのザイール共和国シャバ州で反乱が起こつたのを知っている？」

「ええ。確か、二千の兵力で十八名のキューバ人軍事顧問に統率された反乱軍が進入した事件よね。反乱軍は数百名の白人・黒人を惨殺したというのを何かの本で読んだ気がするわ」

「それ。それよ。その時、日本人の将校がいて、有力なフランス人移住者を救出に向かつて、部下とともに行方不明になっているのよ。写真をメールに添付した

わ」

ちょうどその時、恵子がプリンタで印刷した男の写真を真弓に渡した。

「今、見てるわ。顔つきがちよっと違うわね。でもこのくらいだったら整形で何とかなるわ。部下は何人いたの？」

「イタリア人とロシア人が二人よ」

「で、他に何か手がかりになるようなものは？」

「出身地が北海道札幌市というだけね」

この時、真弓の脳裏に閃くものがあった。襲撃された銀行は東京都内に限られていたので、捜査は自然に関東周辺に限定していた。考えてみれば、車両でも二十四時間以内に北海道に行けるのだった。

「……」

「どうしたの？皆、元気？」

「……真理子が拉致されたの」

「えっ。無事なの？」

「わからない。敵からは何のコンタクトも無いのよ」

### 第三章 少佐

一九七八年五月、中央アフリカのザイール共和国シヤバ州で反乱が発生した。フランス政府は鎮圧のために外人部隊を派兵した。日本人将校と二人の兵士が、有力なフランス人移住者の財宝を略奪し逃走した。一行はジャングルを彷徨っていた。密林のジャングルは、高い樹木のために、一日中日が射さず暗くジメジメと

していた。反乱軍の追ってから逃れ、ジャングルに分け入って、五日が過ぎようとしていた。食料が底をついてから既に三日が経過していた。

日本人将校とその部下二人は、救出する筈であったフランス人移住者の妻とメイドを人質にしていた。妻エミリーは、まだ若く二十代前半の白人女性であり、メイドの方も二十代の東洋人だった。ふたりとも豊かな肢体と美しい容貌を持っていた。反乱軍との銃撃戦にまぎれて、高価なダイヤモンドをかすめ取っていた。時価数十億円はくだらない代物だ。

五人は一列になり、狭い獣道を歩いていた。イタリア人とロシア人の兵士二人が先頭を歩き、次にエミリー、メイド、最後に少佐が続いていた。皆、ひどく飢

えていた。二日間、何も口にしていなかった。このままだと飢え死にするのは目に見えていた。ジャングルには、食物となるような動物や植物は見あたらなかった。外人部隊での階級が少佐である日本人の男は、先ほどから前を歩く、メイドの剥き出しの太股や、薄手のパンティをはいただけの豊かな尻を見つめていた。実に旨そうだった。自然に涎がたまつた。三人は毎日、メイドと人妻を慰みものにしていた。今は性欲より食欲が勝っていた。

「皆、ここで休憩するぞ」

獣道は、周囲百メートルほどの清涼な池のほとりに続いていた。女達は池に顔をつけ、水を飲み始めた。

女達を残し、少佐は木陰に部下二人を呼んだ。

「もう限界だな。後、数日で動けなくなるだろう」

「少佐。何か食べないと、死んじまうぜ」

「食い物ならある」

「どこに……」

アルとイワノフは少佐の視線の先を追った。女達が池に入り全裸になって身体を清めていた。

「まさか……」

アルが腕組みをした。

「実は俺もそれを考えていたんだ」

イワノフが暗い目つきで女達を見つめていた。

「殺<sup>や</sup>るしかないだろう」

「……どっちからにする」

「メイドが先だ。人妻は最後の楽しみにとっておこ

う」

三人は木陰から出て、女達を手招きした。女達は衣服を抱えて歩み寄ってきた。毎日の陵辱のためか、裸でいることにさほど抵抗を感じなくなっていた。アルがエミリーを近くの木立に縛り付けた。

たようだが、胸や尻は十分に張っていた。殺すことに

男達はメイドの裸体をしげしげと見つめた。少し痩せ

イワノフはメイドを背後から押さえつけた。三人の



決めると急に性欲がわいた。女二人の衣服を地面に敷き、メイドを仰向けに寝かせた。メイドは男達の異様な感じをかぎ取り、不安な表情を浮かべていた。

少佐がメイドの股間に顔を埋めた。歯を立て貪り始めた。メイドが苦痛の呻き声をあげた。イワノフは両手で乳房をなぶり、アルは男根をメイドの口に含ませた。メイドの白い身体が、男達の黒く筋骨逞しい肉体の合間に挟まれ、木の葉のように揺れ動いていた。男達は皆、二度精液をメイドの肉体に吐き出した。

メイドは疲れ果てぐったりと横になっていた。少佐がベルトの拳銃を抜いた。

メイドは拳銃を見て、急に震えだした。銃声が出た。股間近くの地面に銃弾が撃ち込まれた。

「お願い。殺さないで。何でもします……」

少佐は泣きじゃくる女をうつ伏せにさせ、馬乗りになり腰の鞘から戦闘用ナイフを抜いた。

「それじゃ。俺達に喰われるんだな」

女の髪を掴み上げ、一気に頸動脈を断ち切った。断末魔とともに、鮮血がほとばしった。白く豊かに盛り上がった尻がぶるぶると揺れ、やがて動かなくなつた。木立に縛られていたエミリーが絶叫を上げ、失神した。

少佐とアルは、血抜きした女の死体を仰向けに寝かせ、戦闘用ナイフを下腹部に突き立て、慎重に首の方に向かって肉を切り進んだ。色とりどりの内臓が露出

した。イワノフは慎重に内臓を取り出した。

少佐とアルは戦闘用ナイフを器用に使い、女の身体を解体していった。豊かな乳房や尻肉が無惨に切り取られていく。イワノフは小枝を集め、焚き火の仕度にかかった。女の身体は、細切れ肉とブロック大の肉塊に切り分けられた。細切れ肉は、乾し肉とするために木立の小枝にさし天火に晒した。ブロック大の肉塊は、塩と胡椒をまぶし棒に刺し、焚き火で炙った。すぐに胃を刺激する肉の焼ける匂いが漂い始めた。

肉が焼けると男達は焚き火のまわりに車座となつて、女の柔肉にかぶりついた。

「うめえな。女の腿肉がこんなに旨いとは」

「おい。アル、次はオマ\*コを焼きな」

食欲を満たした後は、失神から覚めないエミリーに水をかけ、眠りから覚まさせた。

「リンをどうしたの？」

「邪魔になったんで始末した。死体は池に沈めた」

「……この匂いは何？」

「運が良くてね。水を飲みに来てきた猪を殺して料理したんだ」

「猪？」

エミリーの腹の虫が大きな音を立てた。あまりの空腹のためか、死んだリンのことより猪の肉のことが頭に浮かんだ。

「好きなだけ喰わしてやるよ」

少佐は、エミリーに肉塊を渡した。エミリーはリン

の尻肉にかぶりついた。芳醇な肉汁が口中に広がっていく。あまりに美味なため、目を開けることができなかった。少佐は食事中のエミリーを四つん這いにして、白く大きな尻の合間に顔を入れ、舌でアヌスを舐り始めた。エミリーは柔肉に夢中で、肉を頬張ることを止めようとしなかった。

それから十日間、一行はリンの肉で食いつないでいたが、とうとうその肉も底をついた。少佐と二人の部下は手筈どおりエミリーを強姦しその身体を川で洗い清めた。後ろ手に縛り草を敷き詰めた地面に転がした。アルが焚き火の仕度を始めた。イワノフは軍用ナイフを砥石で研ぎ始めた。少佐は、転がしたエミリーの傍らの地面に座り、タバコをふかしていた。

「私をどうするつもりなの？」

「聞かない方がいいと思うがね」

「お願い。助けて。貴方の女になってもいいわ」

「残念だけど。それは駄目だ。お前を処刑することに決めたんだ」

「なぜ。どうして？毎日、貴方達に抱かれているじゃない」

「食い物が無いんだ」

「食い物って。どうして私を殺さなきゃならないの…」

「…そんな。あなたたちリンを殺して…」

「ご想像の通りさ。あいつの肉は旨かったな」

「うっ」

エミリーは、今朝食べた乾し肉を吐き出した。

「今度はお前の番さ。白人女の肉は旨そうだ」

少佐は欲情に濡れた目でエミリーの盛り上がった白い尻を食い入るようにつめた。

「少佐。何か様子が変だ」

少佐は立ち上がり、MAT四九携帯機関銃をかまえ、周囲を見渡した。木立がガサガサと揺れ、原住民がひとり現れた。続いてぞろぞろと四方から十人あまりの原住民が槍や弓矢をかまえ現れた。皆、衣服は何も付けておらず、唯一長大な男根サックをつけていた。顔や身体には様々な入れ墨をしていた。その中から長老らしき男が、現れエミリーの側に寄り、しきりに手振りを使って原住民の言葉で話し始めた。どうやら、エミリーを置いていけと言っているらしかった。少佐は

首をふりM A T四九携帯機関銃の銃口を長老に向けた。長老は大きな悲鳴を放ち、飛び下がった。銃の恐ろしさは承知しているようだ。アルやイワノフもM A S四九半自動小銃をかまえ、原住民と対峙していた。

長く重たい沈黙の後に、長老が少佐についてくるように身振りで合図した。数人の原住民がエミリーに近づき、長さ二・五メートルほどの槍を束ねたものに両手・両足を縛り付けた。その棒の両端を肩で担ぎ歩き出した。捕らえた獲物を運ぶときと同じ方法だった。アルが抗議しようとしたが、少佐が止めた。相手の総力を把握するまで攻撃はできない。

の畔に数軒の葦を編んで作った住居が現れた。住居か  
三十分ほどで獣道が終わり、開けた空間に出た。川



らは煮炊きのためか、白煙が上がっていた。川岸には丸太をくり抜いて作ったカヌーと粗末な筏が浮かべられていた。

一行は、川岸近くの空き地で立ち止まった。

原住民達はエミリーを粗末な木製のテーブルに乗せた。長老が、住居に向かって何か叫んでいた。全裸の原住民の女が、土鍋を抱えて飛び出してきた。それを少佐の前に置き、急いで住居に戻った。土鍋には土饅頭のような代物がいっぱい詰まっていた。

「これで女を置いていけというのか？」

少佐はばからしくなって、首を横に振った。長老が歩み出て、川岸に浮かんでいる筏を指さし、しきりに

何かを口走った。

「筏もつけるというのか？」

また、少佐は首を横に振った。長老が何かを叫んだ。

総勢五十人ほどの戦士達が、手に槍や弓を持って集まってきた。三人のまわりを遠巻きに取り囲み、雄叫びをあげた。アルがMAS四九半自動小銃の引き金に指をかけた。

「わかった。女はくれてやる」

少佐は首を大きく縦に振り叫んだ。長老が右手を大きく上げた。戦士達は静かになった。上げていた槍を降ろした。長老が木製のテーブルに載せられたエミリーを指さした。三人の戦士達が全裸のエミリーの身体に蠅のようにたかり、戒めを解いて持ち上げ、一斉に

走り出した。真っ白なエミリーの裸体は黒々とした男達の渦の中に飲み込まれていった。

「キャー。助けて！」

絶叫がジャングルに響きわたった。五十人にも及ぶ戦士達がエミリーの裸身に群がっていた。

三人は、名も知れぬ河川に筏を浮かべ、下流へと流されていた。

「こんな物食えるか！」

アルが、原住民から渡された饅頭を川に放り投げた。

「少佐。これからどうするんですか？」

「どうするって。戻るのさ。奴らの隙について皆殺しだ。そして予定通りエミリーを料理し、あそこにあつたカヌーも頂いてこんな地獄とは、さよならするん

だ」

イワノフが待ってましたという感じで筏を川岸につけた。一行は上流を目指し、川岸を歩き始めた。

少佐達は原住民の集落近くに到着し、木陰から様子を探った。中央の広場に大勢の男達が集まっていた。

その中心に置かれた木製のテーブルにはエミリーが横たわり、数人の男達が纏わりついていた。両足を大きく広げられた股間に顔を入れているも者、乳房を舐め回している者、爪先をしゃぶっている者達によってエミリーの白い裸体は、したい放題に舐られていた。

時折、エミリーはジャングルに響き渡る鋭い喘ぎ声を発した。まわりの男達は、土製の壺に入れたドブロクを回し飲みしていた。その傍らでは、人間一人が入

れるような大きな瓶が、水をいっぱいに満たされ火に掛けられていた。

長老がエミリーを地面に下ろし、背後から抱き付き  
犯し始めた。エミリーの鋭い喘ぎ声がジャングルに響  
き渡った。

「あいつら。エミリーを喰らうつもりなんですか



ね？」

アルが少佐に語りかけた。

「たぶんそうだろう。この一帯に人喰い人種はいないはずだが」

「で、どうします？」

「アルと俺が、突撃する。イワノフはここで援護してくれ」

アルと少佐は木陰を離れ、林立する木々を遮蔽物にし、原住民達に近づいていった。目標まで五十メートルの地点で少佐のMAT四九携帯機関銃が火を噴いた。それを合図にアルとイワノフのMAS半自動小銃による連射が始まった。広場に集まっていた大勢の原住民の身体から血しぶきがあがった。武器を手にして

立ち上がった者も次々に銃弾の餌食となっていくた。  
少佐は弾装を入れ替え、原住民の輪の中に突入して  
いた。それから先は、混戦状態となった。酒に酔い動  
きが鈍くなった原住民に対し、容赦なく銃弾が撃ち込  
まれていく。槍をかまえ、襲いかかってきた男の腹に  
九ミリ弾を数発撃ち込んだ。一度倒れ、起きあがろう  
とした男の頭をM A T四九携帯機関銃の銃床で叩き  
割った。

弓矢が胸部に何本か撃ち込まれたが、防弾チョッキ  
を貫くことはできなかった。混戦の中、半自動小銃と  
拳銃を両手に持ち、走り回るアルの雄姿が目に入った。  
戦いは五分程で終了した。数十人の男達が血を流し折  
り重なるようにして倒れていた。拳銃を手にしたイワ

ノフとアルが、まだ息のある者達の間を、歩き回っていた。ジャングルには、断末魔と銃声が交互に響いていた。少佐は、木製テーブルに縛り付けられたエミリーに近づいた。身体には、どこにも怪我が無いようだった。ただ、大きく開けられた瞳は、少佐を認めても何も反応を示さなかった。激しい恐怖のために精神に異常をきたしたようだ。むっちりとした太股は広げられ、膣からは大量の精液があふれ出していた。アルとイワノフが仕事を終え、少佐の傍らに近づいてきた。

「この女。いっちまっていますぜ。村中のやつらに犯られたんじゃないか」

「もう。正気には戻らないな」

「本当の牝豚ですね。どうします？」

「原住民の女達にエミリーの身体を清めさせ、それから調理する」

アルが傍らで火にかけている大瓶の水に手を入れた。

「湯加減はちょうどいいくらいです」

「その湯を使わせろ」

アルとイワノフは粗末な泥で壁をかためただけの小屋の中で震えている、若い原住民の女二人を引きずり出し、エミリーの近くまで連れてきた。アルは汗だくになって、身振り手振りで女達にエミリーの身体を洗うように命令した。ようやく理解した二人はエミリーをお湯の入った瓶に入れ、両手を使って身体中を擦すり始めた。その間、まったく無表情のエミリーでは

あつたが、股間に手を入れられた時、鋭い喘ぎ声を上げた。

少佐は、死んだ原住民が手にしていた刃渡り五十センチほどの蛮刀を右手で持ち上げ、刃の状態を調べた。

「こいつはいい得物を見つけた」

アルとイワノフは、洗い終えたエミリーを木製テーブルに仰向けに縛り付けていた。二人の原住民の女が、イワノフとアルの股間にまとわりつき、剥き出された男根を舌で愛撫していた。

「こいつら抱く気にはなれないが、舌使いはなかなかのものだぜ」

少佐は、蛮刀を下げ、木製テーブルに縛り付けられ

たエミリーに近づいた。仰向けに寝ていても崩れない乳房を掴んだ。大きく開かれた太股の間には、きれいなピンク色をした膣が生きづいていた。

蛮刀をテーブルの端に刺し、ズボンを下げ、エミリーに覆い被さった。男根を一気に挿入し腰を動かし始めた。正気が戻らないエミリーの口を開けさせ、無理矢理舌を吸い出した。

「あーん。いい」

エミリーが鋭い喘ぎ声を漏らした。

「いけよ。存分に楽しんでから俺達に喰われるんだ」

いつの間にかアルが、エミリーのアヌスに指を差し込み、中をかき回していた。その後二時間あまりをかけて、三人はエミリーの身体を十分に堪能した。

アルとイワノフは、エミリーを仰向けに縛り直してから、近くの草場に腰を下ろした。少佐がエミリーの傍らに立ち、蛮刀を頭上に掲げた。

「調理の時間だ」

蛮刀を一閃した。エミリーの生首が宙を飛び、草むらに落ちた。近くにいた原住民の女達は悲鳴を上げ、一目さんに走り出した。少佐の蛮刀が一閃、二閃し、エミリーの四肢を切断していく。エミリーは瞬く間に、手足を切断され胴体のみとなった。アルとイワノフが立ち上がり、ナイフを使って手足や胴体の解体を始めた。三人は、切り分けられた尻肉に生のまま、嚙つきがつがつと肉塊を頬張った。

「白人女は脂がのって旨いや」

